

## 丹長

## ひとりごと

⑦

斉藤

讓



自然はいま、舞台を花から若葉の場面へと変えた。華かさから爽かさへの転回である。燃えるような新緑は、私達の心によすらぎを宿らせ、そこを渡る緑の風は、体の隅々にまで生の活力を運んでくれる。緑豊かな田園に住む幸せと充実感を、しみじみとかみしめる昨今である。

若葉の中でもひとときわ鮮やかな彩りをみせるのは、俗に雑木と呼ばれる木々である。椎、楠、檜、樺などあまり用材にならない木を一絡げにして人は雑木と呼ぶが、よく考えてみるとそれは人間の身勝手、不遜さを象徴している言葉であるように思われる。地上に生きる動物や植物は、すべて神によって生を与えられ、それぞれが他には無

い特性をもって生きている。従って、いかなる生物も存在し、生きる権利を平等に持っているはずである。それを万物の霊長と嘯く人間は、己が生きていく上で有用なものに価値を認め、逆に有用でないものを軽視したり、排除したりする。人類の歴史はその積み重ねであり、その結果、自然の生態系を破壊し、深刻な環境破壊を招いていまその回復に苦慮しているといっても決して過言ではあるまい。

▼曾つて昭和天皇が、植物観察をされた折、随行した者が「陛下、これは雑草でございます。」と言ったところ、「君、雑草という名の植物は無いよ。どんな植物にでも立派な名前がついているんだ。」と、窘められたというのを何かで読んだことがある。また、東京湾で魚類の調査をされた時、

採取した魚を観察した後、付人がひとまとめに海に放とうとしたところ、陛下は



## 樹の声

なくして環境問題を語るは空論だといわなければならぬ。先日テレビで、富士山麓の自然破壊の状況をルポしている番組を見た。戦後の植林運動で山麓の雑木林は伐採され、杉や檜林に変えられた。ところが現状は、林業不振によって樹林は荒

れ、下草の生えない地肌は無数の雨水の流れる深い溝を刻みこみ、小鳥や動物も棲まない暗い沈黙の世界を出現させていた。

一方、山の中腹には樹林を突き抜けるような大木が、無数に枯死し、不気味な姿を晒している。

学者は、都市が排出する酸化物が気流に乗り、霧のかかる中腹のあたりに酸性霧となつて降りるせいではないかと語っていた。同時に、北欧やドイツの酸性雨によって全滅した無残な山

の姿も紹介していた。工場地帯の排煙が原因のようであるが、この酸性雨問題は今や世界的な問題となつてきている。

人間がより便利な生活を追い求める中で副産物として生み出される公害は、他の動植物へ被害を及ぼすだけではない、めぐりめぐって人間そのものも、生存を脅かされてきているのである。人間も自然の一員であり、自然との共存なくして生存の道が無いことは自明の理である。

私達一人ひとりが、一度失われた自然を再び蘇らせることは至難の業であることとを心に刻み、そして生活の便利さや豊かさの追求は、自然と調和できる範囲の中に止めるべきであることをしっかりと肝に銘じなければならぬと私は考える。▼ところで、私はいつも大樹の前に立つ度に畏敬の念に捕われる。太い幹、枝を大きく張り、葉を繁らせて天に聳えてその姿は、人を圧倒しまさに偉容という外はない。果してこの木は何時、何処ここに根づき、どのような

環境の中で今日まで生きてきたのだろうかと考え、木にそれを問うてみる。しかし、大樹は黙して語ることがはない。否、木は語っているのに、私にはそれが聞こえないだけなのかもしれない。大木には樹霊が宿っているとよく言う。だから、大樹と向かい合っていると、いつしかそれが本当のように思えてくる。与えられた環境の中で、幾十年、幾百年もの間風雪に耐え唯ひたすら生を全うしようとするその姿は、些事に一喜一憂し静謐を失った人間社会に、無言の抵抗をしているようにも思える。植物は決して己を語らず、他人を語らず、ただ黙して世の移り変わりや人間の生き様を見守るばかりだ。「沈黙」、それは何と重く雄弁なことか。それに対し人間の「饒舌」は、何と軽薄で無味乾燥なことであろうか。雑木といわれる木々がいま私達に値千金の恵を施してくれている。